

靴のデザインにみる戦後史 ①

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎

はじめに、戦前、戦中の靴を振り返ると、1870年(明治3年)東京築地で洋靴が初めて工場生産されてから日本人に普及し、関東大震災(1923年)後の大正末から昭和初期には、様々なデザインの靴がつくられていた。

東京の銀座はおしゃれの中心地で、モダンボーイ、モダンガールといわれる男女がコンビネーションの紳士靴や、ストラップのハイヒール婦人靴を履いていた。また、子供は、甲に梯子型尾錠のスクリッパといわれる靴で、旧制の中学生はフック付の編上靴、女学生は紐付の短靴かストラップの踵の低いパンプスを履いて通学した。

一般に男性は洋服を着用したが、女性の洋装は少なかった。

戦時中は、ぜいたく品は禁止され、靴は軍靴の生産が中心となった。革靴は統制されて、ズック(綿布)や、牛馬革の代用として鯨、鯨、犬革などが使われた。

1945年(昭和20年)米軍機の空襲が激しく8月には終戦となった。焼跡の中で身なりは戦中そのままの姿で、男性は戦闘帽にカーキ色の国民服や復員服(軍服)に軍靴を履き、女性はモンペ姿でズック靴などを履いていた。

進駐軍のアメリカ兵は、茶革のGIシューズやカフ(短い脚絆)付のコンバットブーツを履いていた。

各地に青空マーケット(やみ市)が出来て、食品や衣料、古い軍靴などを売っていた。

戦前から引き継がれてきた紳士靴のデザ

インは、中丸型の爪先で一文字飾り、内羽根5ツ鳩目の短靴であり、婦人靴は紐付で革を積上げた中高ヒールであった。

1946年(昭和21年)戦後公開されたアメリカ映画から、若者たちはアメリカ型のライフスタイルに憧れて、進駐軍将校夫人の服装やPX(軍人や家族用の店)で販売されている原色調の衣料や白と茶のコンビネーションのサドルシューズなどに興味を持った。

また、アメリカの通信販売用カタログなどからファッションを参考にしていた。

日本女性が戦後まもなく履いたパンプスは、はき口がハート型にカットされた“アメリカンヒール”といわれる5センチ位の太いものであった。

男性は、サングラスにアロハシャツ、そして“香港ラバー”といわれるあめ色のゴム底靴を履いて歩いた。

1947年(昭和22年)パリでクリスチャン・ディオールが発表したニュールックは、少し

おくれて日本に伝わり、ロングスカートが流行してハイヒールのパンプスやサンダルが用いられた。

1948年(昭和23年)アメリカで発表されたボールドルックの影響で、男性のズボンの幅が11インチ(約28センチ)の太さになり、靴はミシンを何本も並べて掛けた大胆なデザインで、がっしりしたスタイルのものが現れた。

1949年(昭和24年)GHQの皮革担当官



モンゴメリー女史は、日本の男性が履く靴の爪先が長すぎないように、太くする

ことを勧告し、各メーカーは試作品を製作した。

1945—1949

旧海軍の水兵靴



旧陸軍の昭5式編上靴



米軍のコンバットブーツ



はき口がハート形のアメリカンヒールパンプス



戦前から引きつがれた一文字飾内羽根5ツ鳩目紳士短靴



GIシューズ



コンビネーションのサドルシューズ

ズックなど用いた婦人サンダル



積上革踵の婦人靴

GHQ勧告で作られた太い爪先の紳士靴



ボールドルックにマッチしたミシン飾りの紳士ラバーソール

